

常に変わっている人生と変わらない「宝」

方 蘭

目次

動機

インタビュー

2 - 1、生い立ち

- 1) 優しさの原点：弱さの裏返し
- 2) 学問への傾倒：怠け者からの目覚め
- 3) 学問からの離脱：人生の広がりへの目覚め
- 4) 社会への巣立ち：人生の岐路 大黒柱としての自覚

結論

2 - 2、実生活での Q さんの側面

- 1) 責任感：日本における会社と家庭とのバランスの難しさ—何かの犠牲
- 2) 客観性：事に集中し、同じ事でも心構えにより結果が変わる

結論

結論

まとめ

一、動機

記憶のトンネルを通ってみると、ある人と出会ってから自分が大きく変わったことに再び気付いた。私がその人を Q さんと呼びたい。その「Q」には私の勝手につけた二つの意味を持っている。一つは、Q さんの仕事に対する執念と人に対する優しい気持ちは映画「阿 Q 正伝」にある主人公「阿 Q」と大変似ているという意味である。もう一つは、Q さんと出会ってからもう 5 年間以上経ったが、付き合えば付き合えるほど新しい発見がいっぱい出てくる「Question マーク」のような謎人物という意味も含めている。

この Q さんはかつて私の学生であった。大學 2 年生の時先生の紹介により、私が当時重慶市に駐在していた日本人の Q さんに中国語を教えることになった。まだ学生であった私は当時 51 歳の Q さんに中国語を教えるなんて、あまりにも緊張した気持ちであった。「人と話す時、自分が緊張すると、相手も緊張になる。自分の気持ちをよくさせると、相手の気持ちもよくなるよ」という Q さんの一言で、私が一気に落ち着いた。又、毎回授業の終わりに、Q さんが必ず自分でその内容を纏めようと努力していた。まるで勉強好きな小学生のように平日の仕事がいくら忙しくても、分からない事があったら授業で私に聞けるように必ずメモをしておく。最初私にとって Q さんの魅力は授業中で彼の人への思いやり、何事に対する真面目さとその豊富な人生から伝わってきた面白さと知恵にある

かもしれない。つまり、賢い努力家であるイメージだった。

また、Q さんは一時私の上司でもあった。大學三年生の時私が 2 ヶ月彼らの会社で通訳として見学していた。リーダーとして他人に守らせる事を先ず自分から守り、他人の意見を何時も真剣に聞き、自分の力が及べる範囲では必ず答えを見せる。昼ご飯を皆と一緒に食べながら冗談を言ったり、最近の流行ることを話題にしたりして、大変自由な社風を見せてくれた。私の目から見た Q さんは周りの人と大変仲良くて、人々から信頼されている外交家のような人物であるイメージも加えた。Q さんのことについて更に知りたかったが、仕事の関係で Q さんがその時日本に帰ってしまった。時にはメールでの連絡があったが、2 年後のある日私の悩みを知っていた Q さんが「貴方は本当に中国の日本語教育を改善したかったら、日本に来てみませんか」とアドバイスしてくれた。Q さんの話しのおかげで、当時半年大学で日本語を教えていた私が思いきり仕事を辞め、自分の夢のために日本への留学を決めた。Q さんとの付き合いを通して、知らないうちに自分が常に目標を持ち、できるとしたら何事にも挑戦してみたいという積極的な考え方に変わったような気がした。

今まで Q さんとの付き合いを振り返ってみたら、私が一番 Q さんの魅力を感じたのは、その常に自分のプラスになるように考え努力する向上心と、人と接する時決していやな気持ちをさせずにその人のためにもなるような外交術である。「同じことでも、同じ人生でも、貴方の見方が変わると、人生は変わる」という彼の言葉を出発点として、彼の魅力を支えてきたものについて考察してみたい。彼の見方はいったいどのような見方であるか、常に彼の人生に影響しているのは何かについて探りたい。そのため、Q さんを今回のインタビュー相手として選んだ。

二、インタビュー

2 - 1、生立ち

1) 優しさの原点：弱さの裏返し

・Q さんは小さい時どんな子供だったんですか。

(その家族：おばあちゃん「うちのパパはね。結構努力家だった、他の子供より立派に今の家を支えてくれて本当にありがたいわよ。」他の人は皆黙って頷いていました。

Q さんだけ、笑って「いいえ、いいえ」って言いました。)

Q さん：まあ、それほど自分が小さいときから努力しなければならないって知っていたわけではないと思う。努力って言うのは、何かの事情があって自分の目的を達する為にするもんじゃないか。この言葉より、自分の小さい時、かわいかったと思うなあ。今言ったら皆に笑われちゃうかもしれないが、昔私のあだ名は「うさぎ」だったよ。大変感情的で、何かあったらすぐ泣き出して、よく周りの人に迷惑をかけてしまった。また、人と話すのも苦手で、特に多くの人の前で話せなくて泣き出してしまった事もあった。人が生きている動物の肉を食べるのを見て、その動物が可哀相だと思って、中学 2 年生ぐらいまで全然肉を食べた

事はなかった。それまでジャガイモと魚は私の大好物だった。

・魚も動物じゃないですか。

Q さん：魚が死んだ時いつも無表情ではないか、他の動物の死んだときの苦しい表情とは違って、当時魚は動物だと思わなかった。後学校へ行って分かったが、もう慣れてきたので、やはり自然に魚は食べられたね。

・ところで、いつお肉とか食べられる様になりましたか。そのきっかけは何でしたか。

Q さん：ええどね、中学生の時ある日、家にあった牛肉を乾燥させた振り掛けをご飯の上にかけて食べたら大変美味しかった。ふりかけは見てもあまり動物の形を想像しないのでね、食べてみたら大変美味しくてたまらなかった。それ以来、肉はこんなにおいしいものかと思って、皆と同じ様に食べる事にした。

(この話を聞いて、人が弱い立場に立っていたからこそ人への思いやりも強くなるのではないかと思った。又、良く考えてみたら、彼の弱さの裏にその生まれつきの優しさもよく表しているのではないかと思う。「泣き虫」であっても、ただ彼が自分の感情を素直に表現しただけと私を感じた。私自身も、テレビを見ながら、他の人が何も無いような時でも、私だけ笑ったり、泣いたりしてよく親に「可笑しい」と言われた。馬鹿にされても良いから、別に格好よくしなくても良い、素直な自分が一番可愛いと思う。つまり、Q さんが小さい時から「素直な芯」を持っていると思う。)

2) 学問への傾倒：怠け者からの目覚め

・Q さんは昔から勉強がお好きでしたか。

Q さん：いいえ、子供の時代は誰でも遊びのほうが好きじゃないか。私も同じだったよ。親がお金をかけて、家庭教師を雇ってくれたが、その家庭教師を誘って、一緒にテレビばかり見ていたので、何の進歩もなかったよ。それで、家の近くに新しく開いた塾に送られ、そこで高校までずっと勉強していたわけ。

・塾での勉強はよかったですか。

Q さん：ええ、そこの先生はもともと東京大学の法学部出身で、英語がなかなか上手で、教え方もうまかったかな。又、うちの親とも仲がよかったから、私だけにいつも特別な宿題を残してくれたり、トレーニングをさせたりしていたんだ。そこでの勉強はなかなか面白くて、役に立ったよ。その先生のお蔭で今の私がいるかな。

・以前 Q さんが大学受験のとき、早稲田と慶応両方受かったそうで、受験のために、何か苦労したことはありますか。

Q さん：「苦労」って言ったら、なんとなくつらいイメージがするね。僕は当時自分の好きなことをやっていたから、それほど苦労だと思わなかった。ただ、色々やっているうちに毎日ほぼ夜中二時や三時ごろに寝るのは普通だった。

娘さん：お父さんはそんなに努力したんですか。

Q さん：うるさいなあ、おまえは。努力は努力だ。おまえも努力しなさい。

みんなで：ハハハ……（笑った）

（自分の好きな事ならやる。その為に、幾ら苦労しても、苦労という感じはしない。Qさんの怠け者から努力家への変身過程は、彼は好き嫌いがはっきりしている人であるという印象を強く与えてくれた。私も小さい時から舞踊が好きで、冬でも夏でもダンス教室へ行く為なら、何をしても苦労とは全然感じなかった。が、交通事故に遭ってから、自分の努力する方向は一時失ったような感じで、何をしてもやる気は出てこなかった。Qさんが私より良いところは自然体で過ごし、嫌な事ならやらなくて好きな事やればよい。自分の好きな事なら、全力を尽くし、その平穏な心境に私は大変感心した。そこからQさんの取捨選択と自由自在の心或は「芯」が見えてきた。）

3) 学問からの離脱：人生の広がりへの目覚め

・早稲田も慶応も受かったそうですね。なぜ早稲田を選んで慶応へ行かなかったですか。

Qさん：理由は二つ、一つは当時理工学部というのは慶応より早稲田のほうがずっと上だったからだ。もう一つはうちの親戚の中に早稲田出身の人が何人もいて、僕の小さいときから「お前は将来早稲田へいけ」という教育はずっとされてきたわけ。

・大学に入った後も入る前と同じように努力していましたか。

Qさん：入ったら、もうあまり勉強していなかった。その代わりに、自分の興味には大変力を注ぎ、登山のサークルに入り、時々遠いところへ行行って山を登ったり、合宿したりしていた。今でもときにやっているゴルフや冬に行くスキーもすべてあの時のおかげだね。今思い出すと、なかなか懐かしいよ。

・大学で何も勉強しなくてもちゃんと卒業できますか。

Qさん：いいえ、ぜんぜん勉強しないわけにもいかないよ。必要な単位なら、全部ちゃんと取っておいたよ。一年生の期末試験が終わった後、春休みを利用して当時僕が電気科で、他の機械科や工業営業科、建築科などの五人と一緒に指導教授のもとで江戸時代のロボット復元 動く純日本風茶くみ人形という課題を受けた。そのことで後かなり評価を頂いて、本に出版され、テレビ局で放送されなど、我々の卒業単位にもなったよ。

・ロボットを作るためには何が難しかったですか。

Qさん：江戸時代のものを復元する為に、わからない言葉を年取った人達に聞きその意味が全部わかってから、現代文に直して構造図を書いたりしていた。又、昔使った材料をできるだけ同じ物を使うということで、それらを探すのは一番大変だったかな。例えば、動力に使うゼンマイが江戸時代はひげ鯨のひげでできていたのでそのまま復元しようとして探したが結局探しきれず金属ゼンマイになってしまった。現在では鯨は保護動物になったことにもあるかもしれない。大変残念だった。

（学生時代では勉強は学生の天職であるとよく言われるが、Qさんの話を聞いて、私が人それぞれの時期によって自分にとって大事なものが常に変わっている事に気付いた。その

変化に応じて自分のその時期しか楽しめないことを見付け、更に自己満足まで実行できる人は大変素敵だと感じる。自分の20何年の人生を振り返ってみると、好き嫌いが激しい事は原因かもしれないが、自分の中で好きなことなら出来る、いやなことなら絶対出来ないと思う場合が多かった。そのため、自分が自分の可能性を一気に縮めてしまう。Qさんの場合は、何事にもかかわらず、人生を豊かにするために常に自分のプラスになるようにチャレンジしている楽観的或は快活な「芯」は、私にとって中々魅力的だと思う。)

4) 社会への巣立ち：人生の岐路 大黒柱としての自覚

- ・ 以前Qさんからのメールで大学院へ行けなかったのは、家庭の事情と自分の希望していた会社に入ったと二つの理由を書いていたね。その家庭の事情って言うのは単にお金のことですか。

Qさん：いまさらこの事を言うと、お母さんにはちょっと申し訳ないかも。僕が大学2年生の時お父さんが急になくなったので、ある程度お金を残してくれたが、お母さんが私達四人の子供を大学へ送るのは大変じゃないかと思った。僕が大学院へ行ったら、下の妹と弟達は経済的にきつくなるね。まあ、その時お母さんが自宅で美容院の経営が始まったばかりなので、無理やりに行ったら、たぶん今なんとかなったかもしれないね。でも、今でもよかったと思うよ。

おばあちゃん：うちのパパは以前そんな話しは全然私に話したことはなかったね。

(長い人生では、現実の条件で自分の思う通りに行けない事が多いかもしれない。Qさんの場合は、常に自分なりの目標を持ち、現状によってそれが実現できなくても、絶対挫けないように最大の実現可能性を探しながら余裕を持って進んでいく。またその余裕というのは単なる彼自身の余裕ではなく、その回りにいる人達にも出来るだけ余裕を与える大人の責任感であると言えるだろう。一人っ子である私は今まで周りの人達からいっぱい愛情をもらい、自分の好きな事を勝手にやってきた。今まで親達も含め他人に余裕を与えるなんて全然考えたことはなかった。Qさんの選択を知り、彼の自分だけを考えるのではなく、他人のこともいつも心にかけている「思いやりのある芯」に、大変感心した。)

結論：Qさんの生い立ちを追って、私はQさんの「素直な心」、「快活な心」と人への思いやりのある「温かい心」が新しく発見できた。私はこれらの「心」の総合体をQさんの「芯」と呼ぶ。この様な「芯」を持っているからこそ、最初彼が私に努力家と外交家の魅力を感じさせ、更にその後の彼の人生にも大きな影響を与えたのではないかと推測する。

2 - 2、実生活でのQさんの側面

1) 責任感：日本における会社と家庭とのバランスの難しさー何かの犠牲

- ・ Qさんご自身は責任感が強い人だと思いますか。

Qさん：どうかなあ。自然にそのように選択したから、特に考えなかったね。逆に、今まで自分が仕事の原因で、結婚してからすぐ単身赴任とかよくあったので、家のこ

とにあまり気を使っていなかったとも言えるかもしれないなあ。

・奥様の役割についてどう思いますか。

Q さん：今振り返ってみると、家内はよく支えてくれた。でも、僕が割合家にいるのが好きな人かも、仕事はない時ほぼ家にいる。特に買い物は僕のストレス解消によく効くような気がするなあ。だから、家にいる時買い物は必ず僕のすることだよ。

・奥様はご主人に対して、どう思いますか。

奥さん：お父さんはこの年でもまだ中国や他のところへよく行ってますね。昔から日本の家庭は大体男の人は外で働き、女の方は家で家事などに専念するのは普通の様に思われてきたんですね。私はそとでの仕事は大変だと思いますわ。それにしても、お父さんはよくがんばってくれましたわ。又、よく中国へ行っていたことは原因かもしれませんが、家に帰った時も自分のできることは自分でするし、あまり面倒をかけてくれませんね。

・中々理解し合うご夫婦ですね。長い間の生活の中で大変だった事がありましたか。

Q さん：子供が生まれて、一時家も経済的に本当に大変な状態になったんだね。彼女も仕事に行くって行ってくれたが、やはり家のばあちゃんの面倒も見なきゃいけないし、子供のこともあるし、「家にいていいよ、僕は何とかする」って言って、その後一生懸命仕事の成績を上げようとしていたの。会社でも、大変な仕事にやらせてもその仕事で良い成果を見せようだけと考えて、上司に指摘されても、「おまえのこのやり方はだめ」と叱られても、自分が誠意を持ってしつこく何回も何回も実験し、最後に良い案を出したんだ。この様な事の重ねで、僕が新しい製品を開発し、今の会社での地位もその時からぐっと上がってきたんだ。

(「芯」から生まれた協調性：自然に協力してくれる状況を作り出すために、人に対する「素直な心と優しい心」が不可欠である。又、大変な状態でも自分が「快活な心」さえ持っていれば、自分のプラス思考で回りの人達に影響していけると思う。Q さんの持っている「芯」は、彼自身の日本における会社と家庭のバランスが難しいという問題に直面した時、回りの人と協力し合って順調に進んで行く事に大変役に立ったと思う。その長い間鍛えてきた協調性はある意味で人の生まれつきの性格にも関係しているし、最も重要なのは長い歲月自分の「芯」を持ちながら常にプラスな姿勢で人と接することではないかと思う。私の感じた Q さんの魅力には、彼の「芯」から磨いてきた協調性という能力も含まれている。)

2) 客観性：事に集中し、同じ事でも心構えにより結果が変わる

・人と接する時、何が一番大事だと思いますか。

Q さん：僕の経験で、他の人に何か言われて、嫌だと思った時あまり人に集中しないで、その事をよく考えたほうが良い結果が出るかもしれないなあ。昔僕が嫌だと思った時また怒った時すぐ顔に出す人だったが、お母さんに「お前の怒った顔はよくないね。人に嫌われるよ」と言われ、その後怒っても、できるだけ別れる時笑顔

で人に嫌な思い出を残さない様に努力してみた。今自然にそうになっている。

- ・アメリカや中国へ行った時その人々と上手く行ったのも、この教訓のおかげですか。

Q さん：それもあるかも、でも外国へ行った時むこう側の協力を頂ける為に、先ずこっこの十分の誠意を表さないと。また、むこうの国の事情やそれぞれ接する人の個人の事情などを理解しようという姿勢も大事かも。とにかく、先ず人の話を聞くということだね。何かあった、何かしてほしいということが分かってから、自分がどこまでできるかも判断しやすくなるではないか。外国にいると言葉で通じない事も多くて、色々な方法で伝えようとした時は中々面白かったよ。

- ・具体的にどんな方法を使っていたんですか。

Q さん：アメリカへ行った時それほどでもなかったが、中国で合弁会社を建てた時は結構大変だったよ。当時中国は今の様に外国のものはなかったね。当時その日本人会を通して他の会社の日本人駐在員とそこでの生活経験を交流しようとしていたが、結局自分の周りの人達から教えていただくことは一番確実だったなあ。最初日本食なども多く日本から一時帰国時に持って帰ったが、後では休みの日にホテルの周りの市場で色々な自分のほしいものがあることが分かって現地調達して楽になったな。

日本人社会は重慶では十分ではなかったけれどテニスの好きな仲間と同好会を作り日曜日にテニスが出来、息抜きできたのも助かった。

会社も最終的には日本人も中国人も目指すものは一緒ですので時間はかかったけれど意思の疎通は図れたと思う。結果が出れば国を超えて必ず理解し会える。

リーダーはまず結果を出す事。そして相手を尊重しながら自分を信じ強い意志で物事に向かう必要を感じたな。

- ・ まえ Q さんの合弁会社で実践実習に行った時、ほかの日本人駐在員より中国人の会社員から聞いた話ですが、Q さんへの評価はかなりよかったようで、Q さんご自身はどう思いますか。

Q さん：私が五年間もかけて、あそこの人々と一緒に今の会社を作ってきたから、その会社の人々に対してかなり感情深いものだよ。特に今でも以前の僕の部下だった人達もたまには電話で私に仕事についてのアドバイスを求めたり、最近自分の悩んでいることを話してくれたりして、私自身にとって彼らと一緒に仕事できたのは本当によかったと思う。ただ、リーダーとして、あり意味で人をうまく動かせないと仕事はうまく進めない面が多いので、部下の意見を聞くときも一部必ず受け入れるように努力するが、会社全般の立場からも考えなければならない。まあ、どこで甘くさせる、どこで厳しくするというバランスをとるのは一番難しいかもしれないなあ。

- ・ 部下の人が仕事で目的を達成させるために心がけてきた事はなんですか。

Q さん：人は物事を取り組む時に気持ちよく取り組む時が一番良い成果を出すと思うんです

よ。ですから僕は「気持ちの良い部下は良い成果を出す」をモットーに彼らが気持ち良く仕事が出来環境作りに意を用いましたね。いやいや仕事をしていても良い仕事は出来ないよね。

・中国でのコミュニケーションはどの様に心がけましたか。

Q さん：仕事面では必ず通訳を介しました。正確に内容を伝えるためには中途半端な語学力では駄目だと思います。中国の幹部が日本語を話すからと言って日本語を伝えるべき意味を理解していると思ってはいけません。日本人は相手が日本語を話すだけで自分の言いたい事が伝わったと思う人が多いですね。これは日本人が語学に自信が無い事の裏返しかもしれません。片言の日本語でも話し掛けられると相手に心を許してしまいすっかり信用してしまうのではないですか。でも後で相手がやっている事が自分の意思に反している事に気づいて愕然とする事になります。伝えてから実際にやって貰って初めて伝わった事が確認できるものですね。この点の注意が物事を正確に進めるための注意点かな。

(「芯」を持って、人の心の壁を取り払う客観性：人に嫌な気持ちをさせず、他人の意見を尊重しながら自分の立場も失わないように一緒に目的を達成していく事ができるのは、一目で簡単に見えるが、実生活で上手く実行できる人は中々少ないと思う。私自身は割合率直な性格を持っているが、何でも素直に言えば良いとずっと思っていた。物事は全て正と反の両面性があるとよく言われるが、実はもっと複雑であると思う。Q さんのように人の心の壁を取り払うコミュニケーションができる裏に、彼の持っている「芯」にある「プラス思考」の考え方は常に彼を国際人として、物事の両面性から心構え、客観的に対応していく態度は、その大人の魅力の一つであると私が考えた。)

結論：実生活での Q さんの側面に対するインタビューには、Q さんが自分の「芯」を持ちながら、回りの人と上手く協力し合っていく協調性を磨いてきた。国際人として色々な人と接する時、人の心の壁を取り払うコミュニケーションができる事の裏に、彼の心構えと客観的に対応する態度は彼の魅力に転じた。最初 Q さんの「芯」から感じた魅力は、その常に変化している人生に応じて、彼の能力と知恵に成長してきたと思う。つまり、人の元々生まれつき潜在している魅力が様々な試練を受け磨かれて成熟した後、一種の知的な魅力になったのではないかと私が考える。

三、結論

このインタビューを通して、自分が前 Q さんに対する単純な努力家と外交家のイメージはますます複雑になり、あり意味で人の肖像を描いているように最初単なる固まった輪郭だったが、今その空洞な目から喜怒哀楽の感情が生まれ、その心からいっぱい生き生きしているものが伝わってきたように感じる。Q さんの生い立ちをおって、彼の「素直な心」、「快活な心」、人に対する優しい「温かい心」などの彼にしか一生持ちつづけられない「芯」を発見できた。更に、Q さんの実生活の側面から、彼の社会人として磨いてきた人と一緒

に上手く協力し合って生きていく協調性という能力と国際人として常に物事の両面性から心構え、客観的に対応するの知恵という魅力も発見できた。Qさんの魅力の探りを通して、人がいつもそれぞれの変わる人生を送っていることに再び気付いた。ただ、その常に変わる人生ではQさんの持っている「芯」のように我々もそれぞれしか一生持ちつづけられないもの或は「我々の芯」があるのではないかと思う。Qさんから私に伝わってきた魅力は、彼の「芯」から生まれ、更にその「芯」を持ちつづいていくうちに成長しているものである。その為、結論としてこの常に変わっている人生の中にQさんが彼しか持たない彼の「芯」という彼の「宝物」を持っているからこそ、私が彼の魅力をよく感じる。我々もきっとそれぞれの変わらない「宝物」を持っているはずである。この私しか持たない「宝物」を自分の中で失わない限り、きっと何時か誰に自分の魅力も感じさせられるに違いない。

四、おわりに

何ヶ月の授業に参加し、授業ではない時間もインタビューやメールでの意見交換などの活動を通して、自分から絶対やりたいと思わない一つの学習をやり遂げてきた。なんとなく心から喜びを感じている。

この喜びは、一つのハートな作業を完成してきた達成感にもあるし、もう一つはそこから得た私にとっての三つの収穫である。

考えたくない事でも考えてみたら、意外な発見ができる。

一人だけで考えるより、多くの人々と話し合っただけで考えたほうが勉強になる。

魅力というのは何か。他人の魅力を感じられるようになると自分の魅力も発見できる。

これからもこの三つの収穫を活用していきたい。そのため、本当によかったと思う。

この授業を通して、自分が言語文化について考えられるのは、どの様に学習者自身の表現を促進するか、このような授業で一番考えなければならない事ではないかと思う。そのため、何の主題を取り入れてもいいから、その主題は必ず学習者のやりたい主題ではなくてもいい。が、ただその主題に学習者それぞれ選択できる自由を与えなければならない。また、誰でも何か自分の言葉で表現できる主題でなければならない。主題を決めたら、そのやり方を明確にし、事前にこの活動の進む計画もちゃんと立てなければならない。全ての用意ができてから、活動の中で学習者のお互いのコミュニケーションをどの様に活発させる大変重要なポイントだと思う。

いきる社会の限定、いきる社会の人々を対象としても限定、この活動の土壌であると思う。が、このような土壌を練習場として、これからもこのように違う土壌での練習を繰り返し、国際人として共通な言語文化の認識がそこから生まれるのではないかと思う。

最後に、私の場合はこれから少なくとも日本社会で二年間生活していかなければならない事になっている。人がある程度自分の意志で自分のする事を決めているが、常に社会や周りからの色々な制限を受けている事というまでもなく事実である。このような制限のあ

る事実によく対応できる様に、常に自分の力を最大限に発揮するために、人々の力を借りるのは人間の優れた知恵であると思う。ただ、その借りる方法として人によって違っていく。わたしは、言語文化の授業を通して、このような知恵を勉強していきたい。これからの学習でも、バイトでも、娯楽でも、生活の全てについて。

この活動ですっと支えてくれてきた人々に真に感謝と申し上げます。